

日 時： 2023年10月7日（土） 14:00～15:30

講 師： 水上 文氏（文筆家）、杉田 俊介氏（批評家）

会 場： 池袋キャンパス 10号館 X305 教室

第90回ジェンダーセッションは、文筆家の水上文氏と批評家の杉田俊介氏をお招きし、日本の文芸批評について、メンズリブとクィア・フェミニズムの観点からお話いただきました。

杉田氏によれば日本の文芸批評は、小林秀雄が唱えた「無私へと至る道」のように、個人の属性や解釈を捨ててテキストを熟読することをこそ重んじる立場を理想化してきたといえます。この立場は、本居宣長などの国学的系譜にまで遡ることのできるものですが、他方で近年、活躍の場を増やしつつある女性や多様な背景を持つ書き手による批評を、ある種のイデオロギーやアイデンティティ・ポリティクスに陥ったものだと不当に矮小化し、棄却することの裏づけにもなってきました。しかし、批評の無私性とは、批評界において圧倒的多数を占める男性が自らの立場を透明化し、普遍を標榜することで成り立つ虚構に過ぎないものであり、日本の文芸批評は男性的な論理で規定されてきたと水上氏は指摘します。こうした問題意識を共有した上で、今日、メンズリブ批評やクィア・フェミニズム批評にどのような可能性があるか、お二人に対話していただきました。

フェミニズム批評とクィア批評の関係について、水上氏は「女性とは何か？」という問いを突きつめたとき、生/性を女性と男性に差異化しつつ、両者のあいだに位階秩序を設けるような構造化されたジェンダー規範や、排他的な異性愛規範に行き当たると言います。そのとき、これらの規範的な枠組みを問いに付すのであれば、フェミニズム批評とクィア批評の試みは切り離し得ないと説きます。しかし、例えばカイラ・シュラーの『ホワイト・フェミニズムを解体する』（明石書店、2023）が、ホワイト・フェミニズムに対抗するものとしてインターセクショナルなフェミニズムを歴史的に位置づけたり、昨今、一部のラディカル・フェミニストを含む人々が、トランスジェンダー差別的な発言をしたりしているように、フェミニズムも一枚岩的とは言えない状況で、シスヘテロ男性ないし後発の運動としての男性学は、そこから何を学び取り、どう応答できるか？と杉田氏は問いかけます。というのも、今「批判的男性学」なるものを構想しようとするなら、交差性を取り入れ、多様な男性の存在を前提にする必要がある一方で、まずはマジョリティ男性を相手にしなければ、男性特権や現行の社会構造を十分に問えないのではないかと、というジレンマが生じるからです。個々の具体性に立脚する必要性と、同時にそれが他者を排除する危険性に言及しつつ、水上氏と杉田氏は太宰治の『人間失格』（1948）を参照し、しばしば日本の男性作家による私小説が「誰かを犠牲にすることに苦しむ可哀想な私」に収れんする——しかもその私は最終的に女性の登場人物によって赦される——傾向をもつことを踏まえ、ナルシスティックな自意識に陥ることなく、他者からの倫理的な呼びかけを引き受けるような内省がいかんして可能か、議論されました。

質疑応答では、批評の敗北が叫ばれる中で、批評のポジティブな可能性はどこにあるのか？ということや、今日の議論の手がかりになるような作品について参加者から質問がなされ、お二人に丁寧にご回答いただきました。近年、関心が高まりつつある男性学やそのフェミニズムとの関係について示唆に富んだお話をしていただいた水上氏と杉田氏に、心よりお礼を申し上げます。

（立教大学ジェンダーフォーラム事務局 片岡佑介）

